

3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) デルフィニウムの管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○デルフィニウムの管理 ○シクラメンの育苗管理 ○シンテッポウユリの植付け <p><さくらひめ></p> <p>4月の切り花用‘さくらひめ’の生育ステージは、9月中旬定植が2番花の開花期、10月中旬定植が2番花の出雷期、11月上旬定植が2番花の抽台期になり、鉢花用‘さくらひめ’は開花期になる。</p> <p>－切り花－</p> <p>ア 温度管理</p> <p>最低夜温は10℃を確保し、最低気温が10℃を上回る頃からは暖房を中止してハウスのサイドを開放する。晩霜や強風のおそれがある場合はサイドを閉める。</p> <p>昼間はハウス内の温度が25℃を超えないよう換気する。25℃を超える日が続くと、切り花品質の低下を招くので、換気扇や循環扇、遮光ネットを活用して温度をコントロールする。</p> <p>イ かん水・施肥管理等</p> <p>抽台期は土壌を乾かさないようにかん水し、出雷後はかん水量を少なく土壌を乾かし気味にする等、生育ステージに合わせてかん水量を調整する。ただし、開花には水分を必要とするため、少量のかん水により開花を促す。</p> <p>施肥管理は、有機配合肥料を3～4週間おきにチッ素成分で6 kg/10 a 程度施用する。生育適温となる4月からの生育は非常に旺盛で、この時期に肥料切れを起こすと生育が著しく阻害されるため、生育状況を見極めながら確実に追肥する。</p> <p>－鉢花－</p> <p>ア かん水、施肥管理</p> <p>日照量が多いとしおれやすいため、乾かさないようにかん水する。肥料が切れると下葉が黄化するため、I B化成肥料を4号鉢で毎月3粒/鉢施用する。</p> <p>イ 温度管理</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) シクラメンの育苗管理</p>	<p>切り花の温度管理に準じる。</p> <p><エラータム></p> <p>ア 温度管理</p> <p>2番花の採花終了後は、3番芽の萌芽を促すために最低夜温を12～14℃に設定し、茎が伸長を始めたら夜温を10℃まで下げて管理する。最低気温が10℃を上回る頃からは暖房を中止してハウスのサイドを開放する。晩霜や強風のおそれがあれば、サイドを閉じるようにする。</p> <p>昼間の温度管理は‘さくらひめ’に準じる。</p> <p>イ かん水・施肥管理等</p> <p>2番花の採花が8割程度終了した時点でたっぷりかん水し、3番芽の萌芽・伸長を促す。茎葉伸長期から発蕾期にかけては土壌を乾かさないように適宜かん水し、草丈の確保に努める。</p> <p>施肥管理は、有機配合肥料を2週間おきにチッ素成分で6kg/10a程度の施用とするが、生育状況を見極めながら確実に行う。</p> <p>ア 鉢上げと水管理</p> <p>2～2.5号ポットに鉢上げしたセル苗は、1.5～2か月後（本葉8～10枚程度：4月下旬）に3号ポットへ鉢替える（写真1）。この時期の移植管理は後の芽数・葉数に影響するので、根を老化（根鉢の褐変）させないように適期に行うことが重要である。用土は、前回の鉢上げ時と同じものを使用する。</p> <p>水管理は上部かん水を基本とし、土壌水分の乾湿差をつけないようこまめなかん水に努める。水不足を繰り返すと葉の黄化が急激に進み、その後の生育が著しく抑制されるため（回復策もない）、計画的な出荷を行うためにも適切なかん水を心がける。</p>



写真1 3号ポットに鉢上げした苗

項 目	作 業 内 容
<p>(3) シンテッポウユリの植付け</p>	<p>イ 施肥管理</p> <p>4月からの育苗期は、側芽を順調に確保・生育させるためにチッ素の変動が少ない肥培管理を心がける。</p> <p>チッ素濃度が高すぎると、主芽の生育が優先し、側芽の形成が遅れる。反対にチッ素濃度の低い管理でも、生育不良や側芽の少ない苗となる。生育の目安としては、葉色はやや薄め、葉の展開がゆっくりで、1枚1枚の葉が大きくなならない状態が良好といえる。際にはチッ素濃度 50 mg/L (ppm) 程度 (チッ素：リン酸：カリの成分比が 2 : 1 : 2) の液肥を 3～4 日間隔で定期的に施用する。</p> <p>なお、肥料切れとなった苗の生育を回復させるために過剰施肥を行っても、側芽形成は抑制され花芽の形成が早まり、葉の肥大のみが促進され、葉数・根量の少ない苗となる。そのため、肥培管理を怠らないことが肝要である。</p> <p>4月は7～8月出荷用シンテッポウユリの定植時期となる。連作障害が発生しやすく、水分を多く要求するため、水田転換畑へ作付けし、4～5年水田に戻すのが一般的である。</p> <p>ア ほ場準備と定植</p> <p>堆肥は 10 a 当たり 3～5 t とし、できるだけ早い時期にほ場へ施し耕起しておく。土壌酸度は pH 6～6.5 に調整し、肥料はマルチ栽培が前提になるため、長期肥効型肥料を主体とする。基肥として、チッ素成分で 35 kg/10 a 前後を、定植の 20 日前までに施用する。土壌水分が適度に保たれた状態で畦立てし、保温・保水と雑草防止のためにマルチ (銀黒かシルバーポリマルチ) をただちに敷設する。</p> <p>施設で管理された苗は、定植の 2～3 週間前から徐々に外気温に慣らし、早期抽台が多くなる老化苗とならないよう適期に植え付ける。定植適期の苗齢は、箱育苗で本葉 4～5 枚、プラグ育苗では 3～4 枚程度を目安とする。</p> <p>植付け時の苗の深さは、球根が隠れる程度の浅植えとする (深植えは生育遅延や立枯病の要因となる)。なお、箱育苗では掘取り時の根の切断や乾燥が、定植後の活着不良や品質低下を招くので、無理な力がかからないよう丁寧に掘り取り、速やかに定植する。</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>苗の植付け間隔は、株間・条間ともに 12 cm の 6 ～ 8 条植えが一般的で、10 a 当たりの総植付け本数は 3 万本程度となる（写真 2）。</p> <p>イ 定植後の管理</p> <p>定植直後は十分かん水するとともに、白寒冷紗で 20 日程度トンネル被覆し、遮光と防風を図ることで苗の活着を促す。生育初期に乾燥させると早期抽台が多くなるため、正常な抽台が始まる頃までは土壌を乾燥させないよう降雨の状況を見ながら適宜かん水する。また、早期に抽台した細い茎（鉛筆の太さを目安とする）は正常な切り花にならないので 5 月上旬までに摘心し、株元から新たな二次茎の発生を促すようにする。</p> <p>定植後に晩霜の心配があるときはビニルフィルム等で夜間保温を行い、降雨が続くと予想される場合には葉枯病の予防を徹底する。</p>



写真 2 定植初期の生育状況

（作成 農林水産研究所）